

(資料 3) コロナ下の女性への影響について

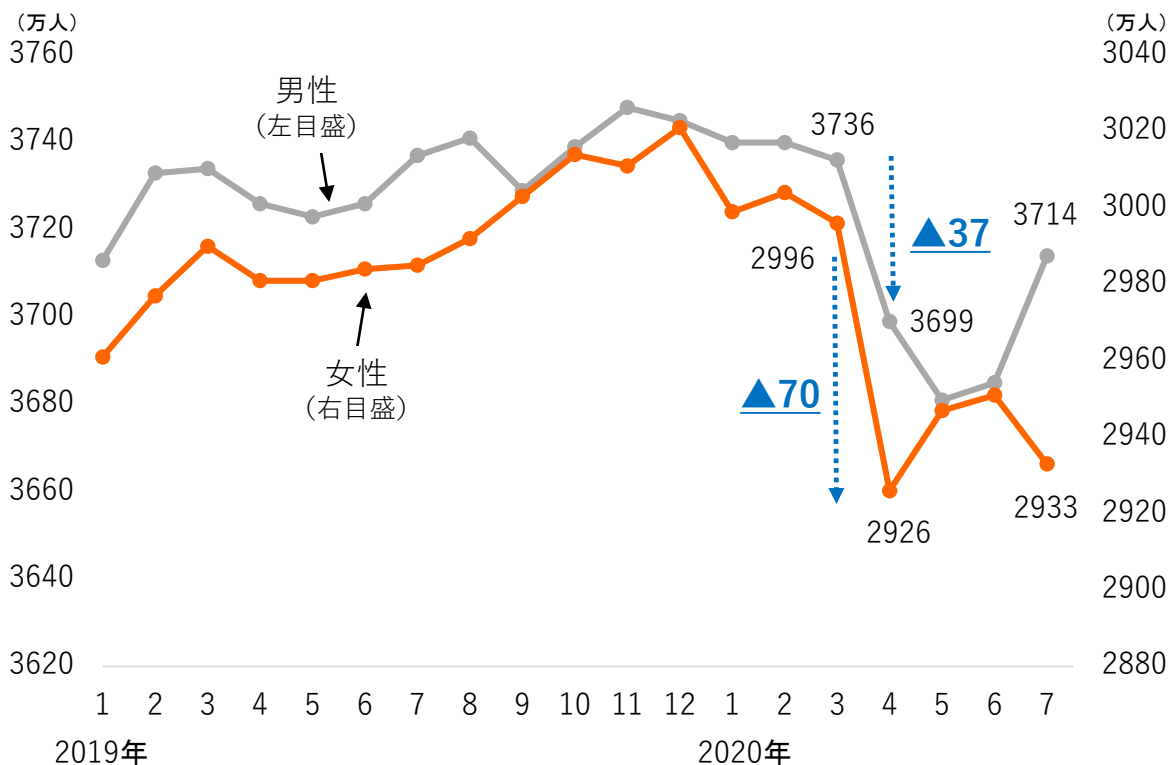
令和 2 年 9 月 3 0 日

内閣府男女共同参画局

就業者数・休業者数の推移

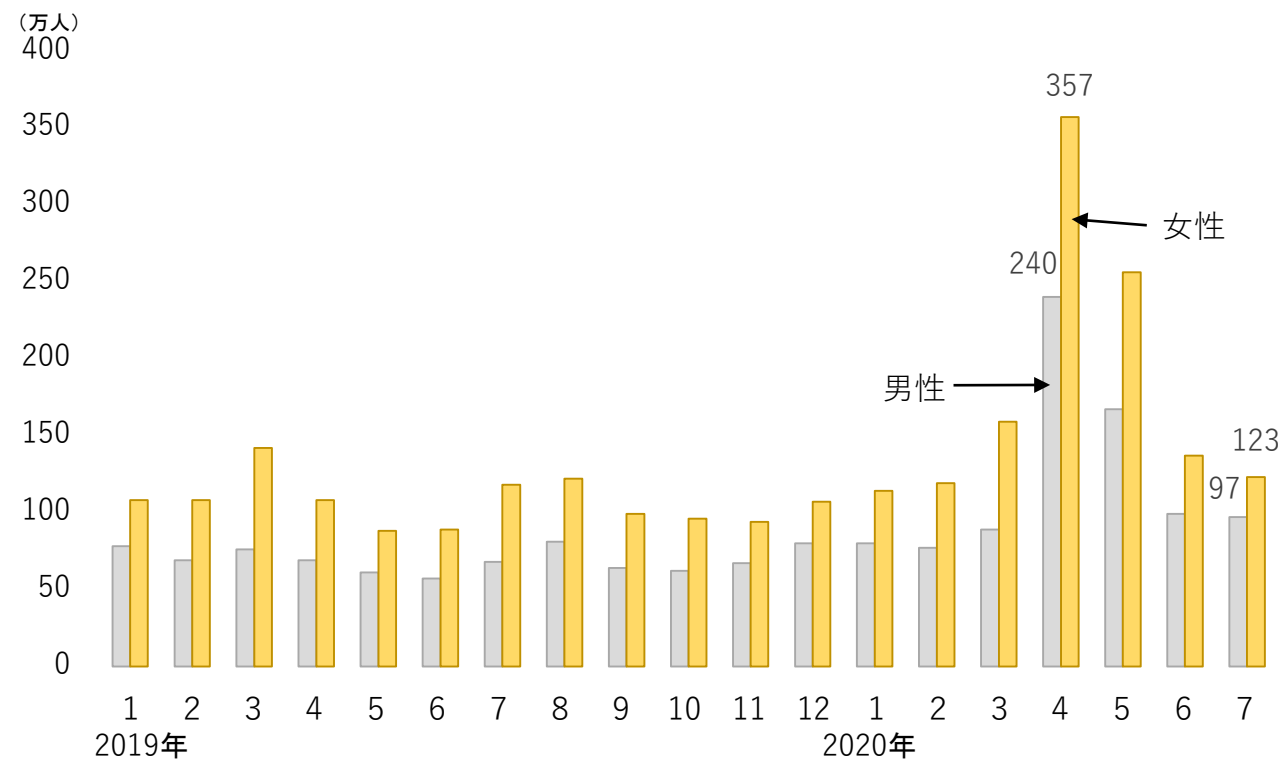
- ✓ 就業者数は、男女とも2020年4月に大幅に減少。特に女性の減少幅が大きい。（男性：37万人減、女性：70万人減）7月を見ると、男性の就業者数が増加している一方、女性の就業者数は減少している。
- ✓ 休業者数は、男女とも2020年4月に大幅に増加し、その後減少傾向にある。

就業者数



(総務省「労働力調査」より作成。季節調整値。)

休業者数

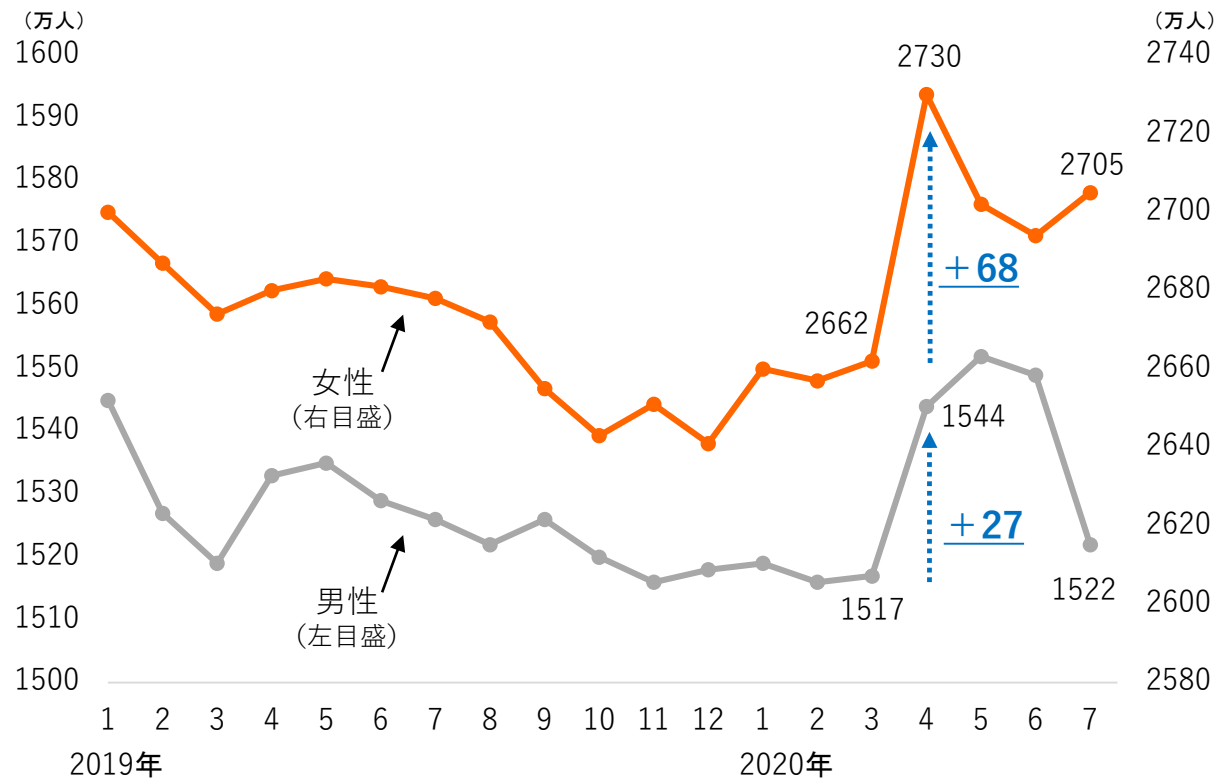


(総務省「労働力調査」より作成。原数値。)

非労働力人口・完全失業者数の推移

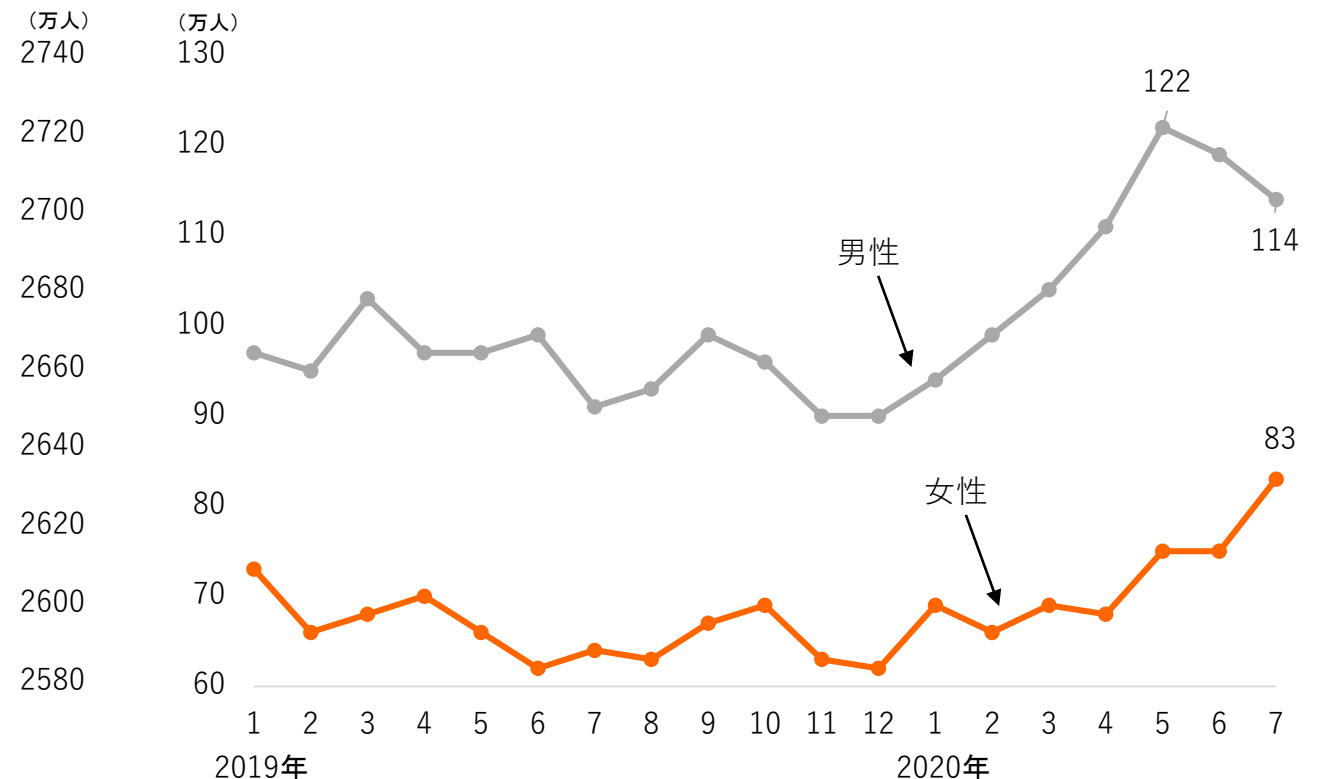
- ✓ 非労働力人口は、男女とも2020年4月に大幅に増加。特に女性の増加幅が大きい。（男性：27万人増、女性：68万人増）7月を見ると、男性の非労働力人口が減少している一方、女性の非労働力人口は増加している。
- ✓ 完全失業者数は、男性は2020年5月まで増加し、その後は減少に転じる一方、女性は2020年4月以降、増加傾向にある。

非労働力人口



(総務省「労働力調査」より作成。季節調整値。)

完全失業者数

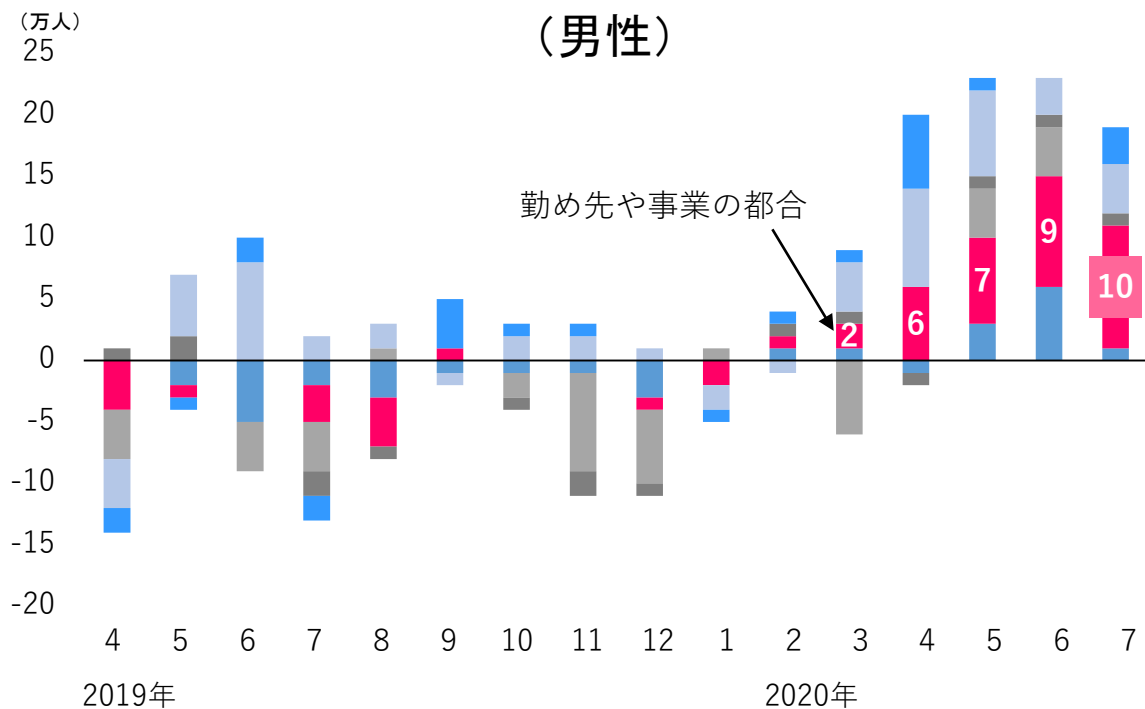


(総務省「労働力調査」より作成。季節調整値。)

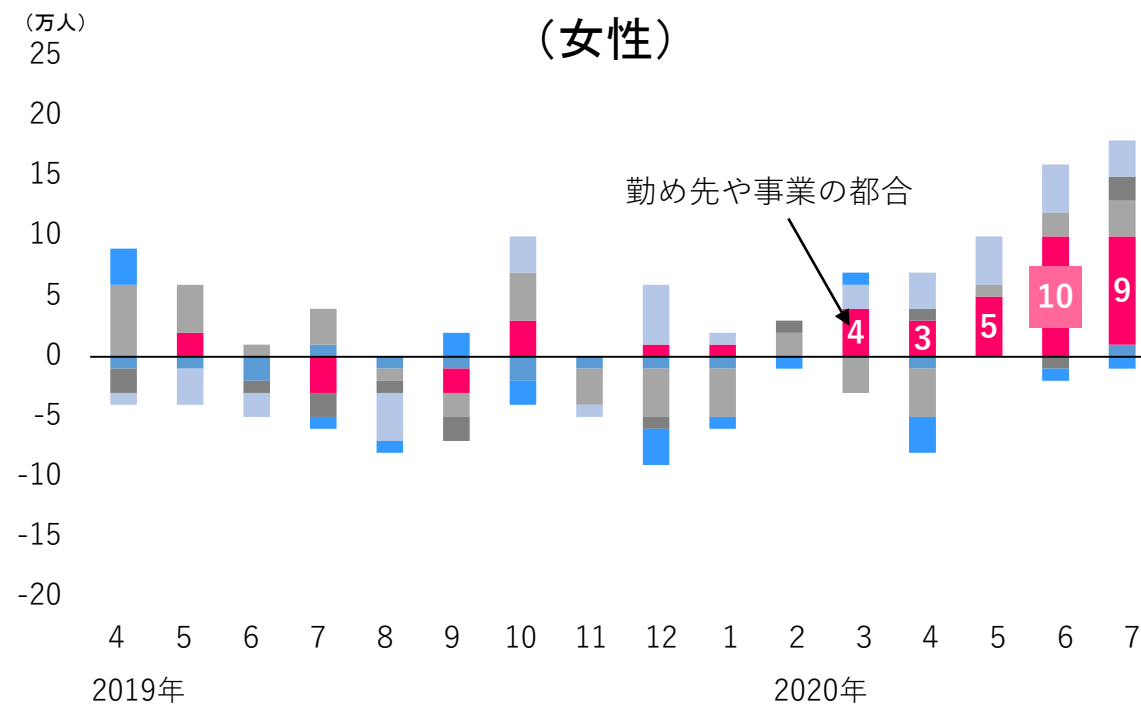
求職理由別完全失業者数の推移

✓ 完全失業者の求職理由を見ると、男女とも2020年3月以降、「勤め先や事業の都合」が対前年同月で増加。

求職理由別完全失業者数の前年同月差 (男性)



求職理由別完全失業者数の前年同月差 (女性)



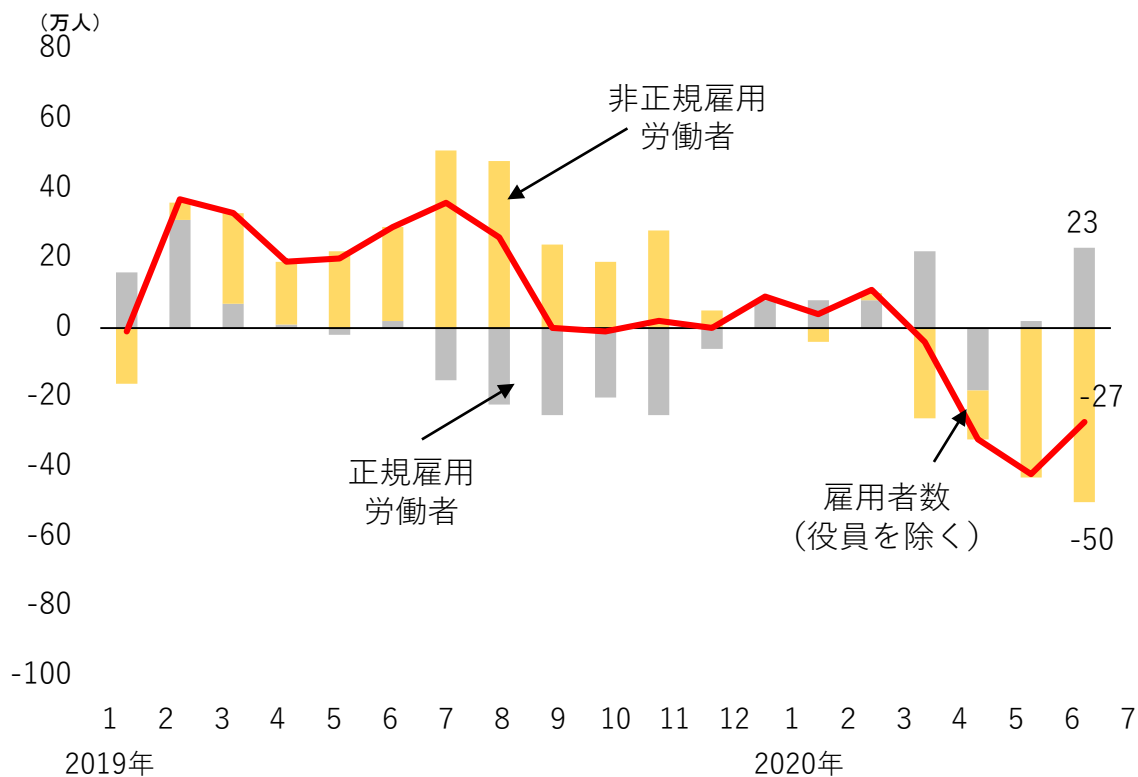
- 定年又は雇用契約の満了
- 自発的な離職 (自己都合)
- 収入を得る必要が生じたから
- 勤め先や事業の都合
- 学卒未就職
- その他

- 定年又は雇用契約の満了
- 自発的な離職 (自己都合)
- 収入を得る必要が生じたから
- 勤め先や事業の都合
- 学卒未就職
- その他

雇用者数の推移

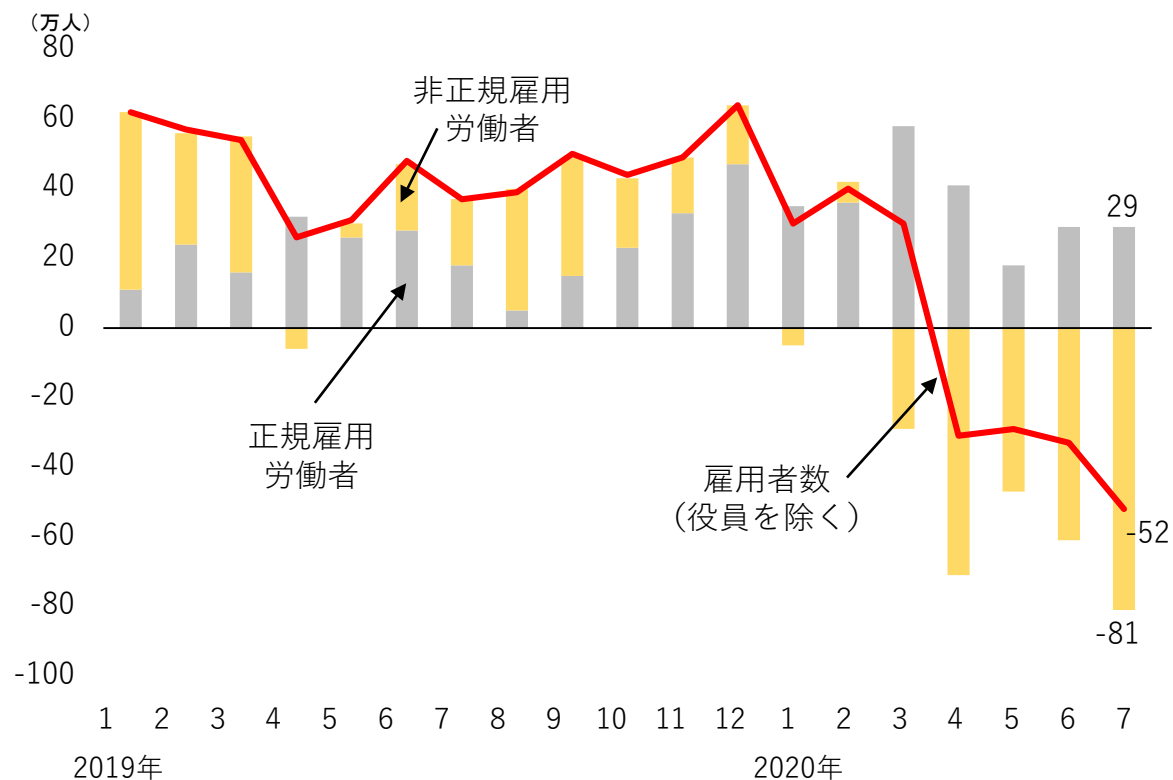
- ✓ 雇用者数は、2020年4月以降、対前年同月で減少。
- ✓ 雇用形態別の内訳を見ると、非正規雇用労働者の減少幅が大きく、特に女性の非正規雇用労働者の減少幅が大きい。

雇用形態別 雇用者数の前年同月差（男性）



(総務省「労働力調査」より作成。原数値。)

雇用形態別 雇用者数の前年同月差（女性）

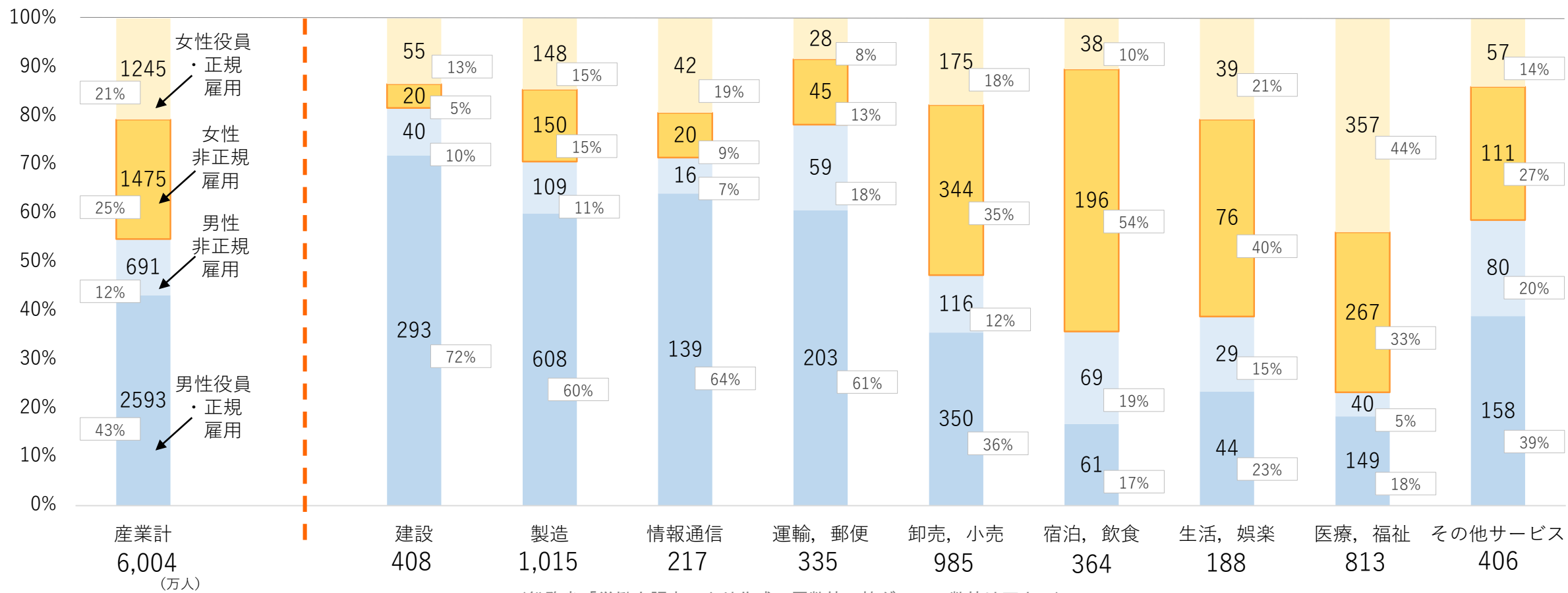


(総務省「労働力調査」より作成。原数値。)

産業別雇用者の男女別・雇用形態別の割合

- ✓ 女性は男性に比べて非正規雇用労働者の割合が高い。
- ✓ 特に「宿泊，飲食業」「生活，娯楽業」「卸売，小売業」「医療，福祉」は、女性の非正規雇用労働者の割合が高い。
- ✓ また、女性の非正規雇用労働者を人数別で見ると、「卸売，小売業」「医療，福祉」「宿泊，飲食業」が多い。

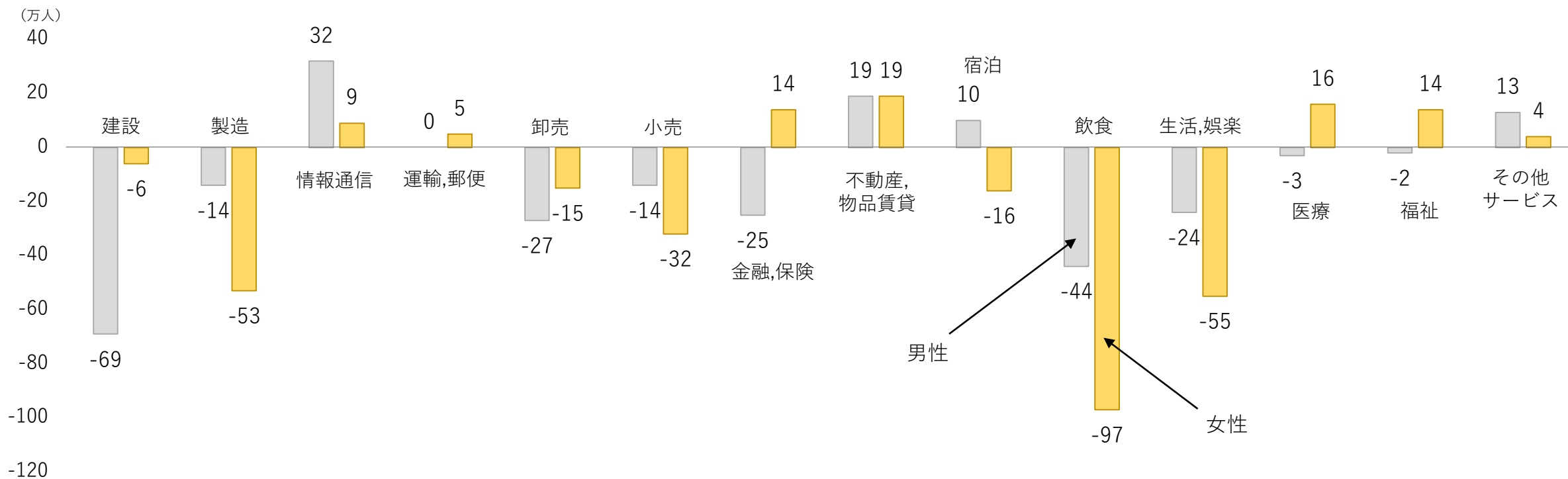
産業別雇用者の男女別・雇用形態別の割合（2019年）



産業別就業者数の推移

- ✓ 就業者数の前年同月差を産業別で見ると、男女とも「飲食業」「生活、娯楽業」の減少幅が大きい。
- ✓ 特に女性の「飲食業」「生活、娯楽業」「製造業」「小売業」の就業者数の減少幅が大きい。

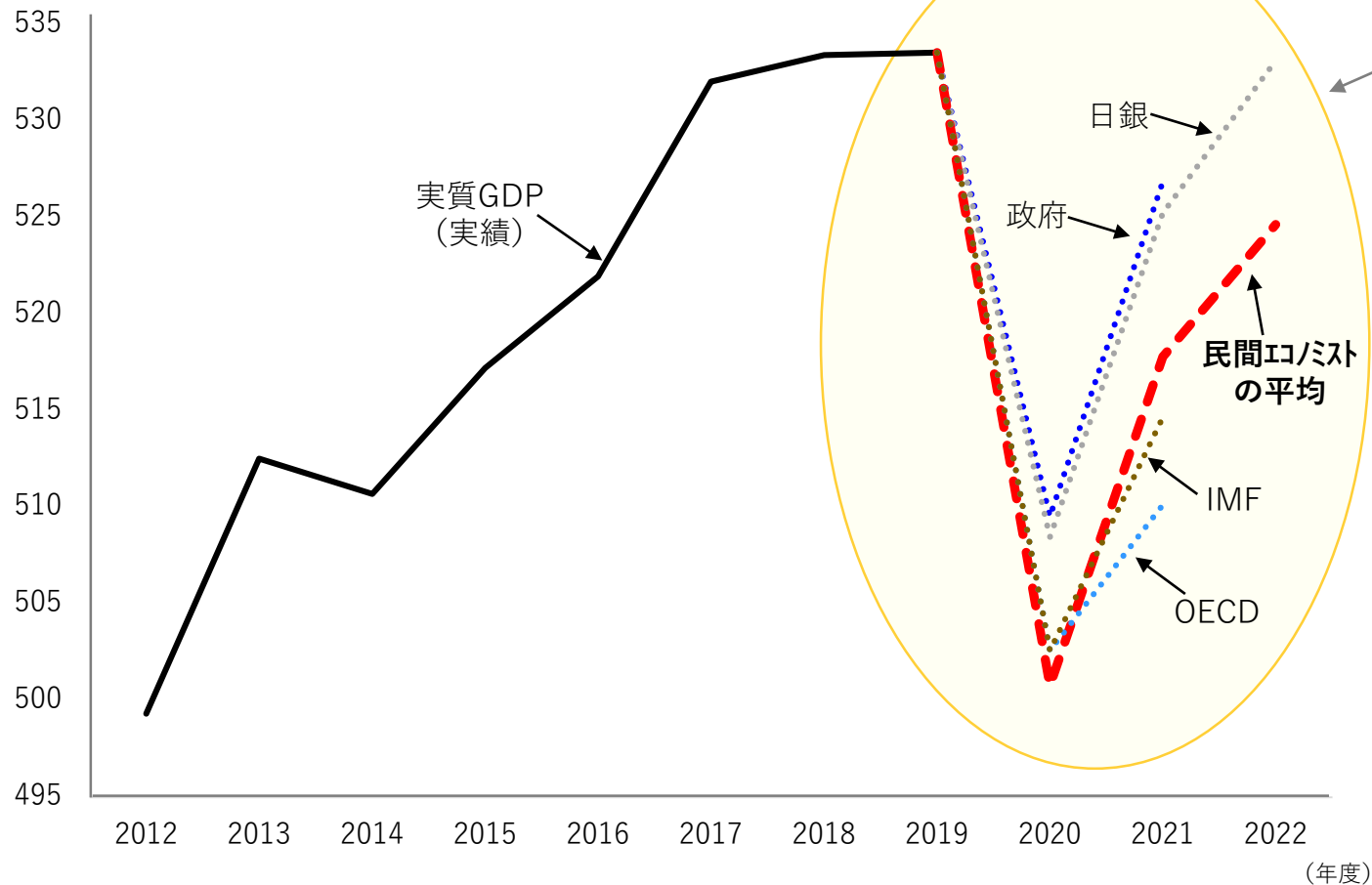
産業別就業者数の前年同月差（2020年4月～7月の累計）



今後の経済見通し

主な機関の実質GDPの見通し

(実質GDPの水準、兆円)



実質GDP成長率の見通し

(カッコ内の数値は2019年度の実績を100とした場合の指数)

		2020	2021	2022
政府	内閣府 (年央試算)	▲4.5% (95.5)	+3.4% (98.7)	—
	日本銀行 (経済・物価情勢の展望)	▲4.7% (95.3)	+3.3% (98.4)	+1.5% (99.9)
	民間エコノミストの平均 (ESPフォーキャスト調査)	▲6.14% (93.9)	+3.40% (97.1)	+1.32% (98.3)
国際機関	OECD (暦年)	▲5.8% (94.2)	+1.5% (95.6)	—
	IMF (暦年)	▲5.8% (94.2)	+2.4% (96.5)	—

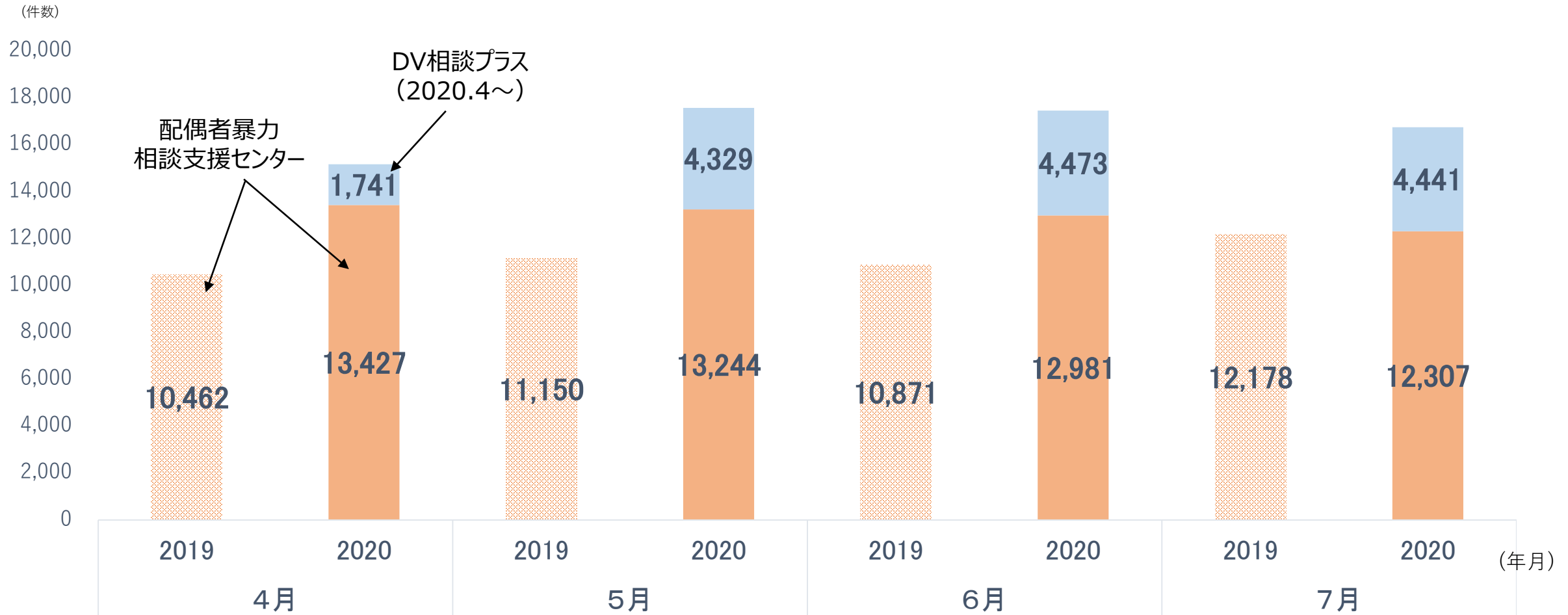
※内閣府「国民経済計算」、内閣府「令和2(2020)年度内閣府年央試算」

日本銀行「経済・物価情勢の展望(2020年7月)」、公益社団法人日本経済研究センター「ESPフォーキャスト調査」

OECD「Economic Outlook」、IMF「World Economic Outlook」より作成。

DV相談件数の推移

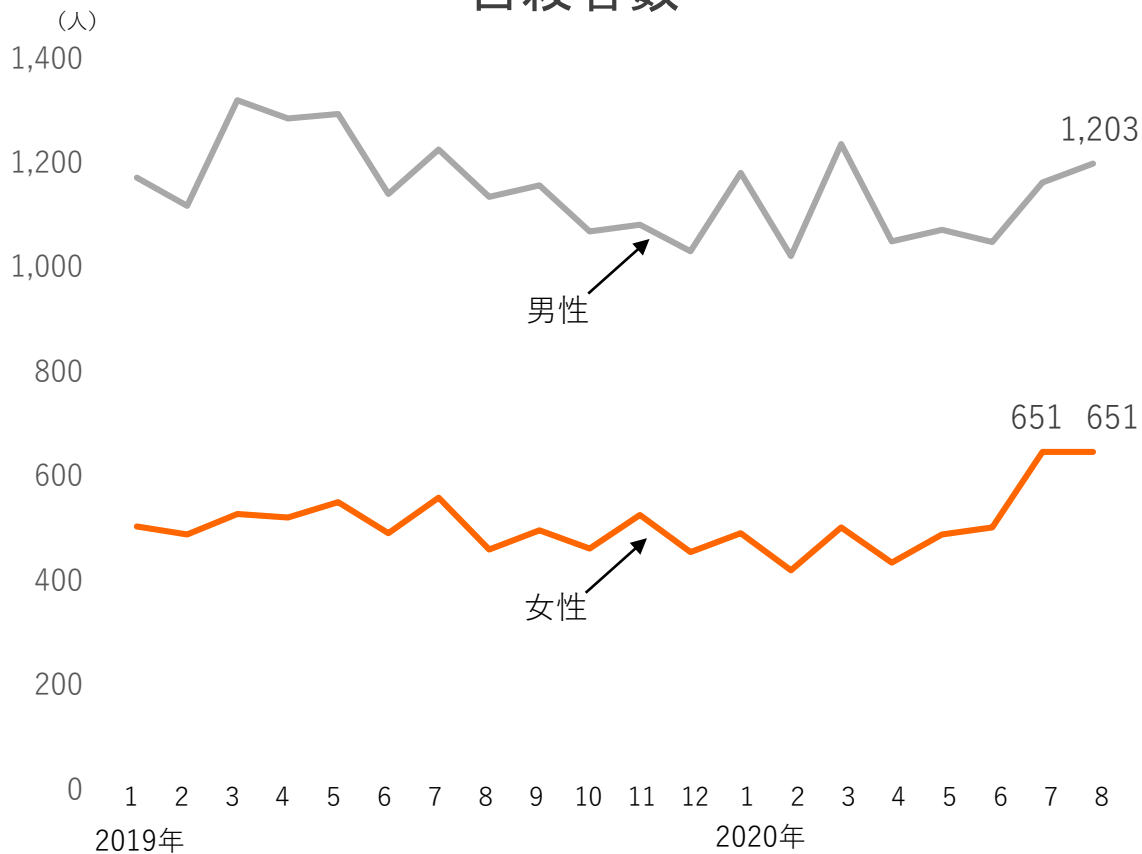
✓ DV相談件数の推移を見ると、5月・6月の相談件数は前年同月の約1.6倍。



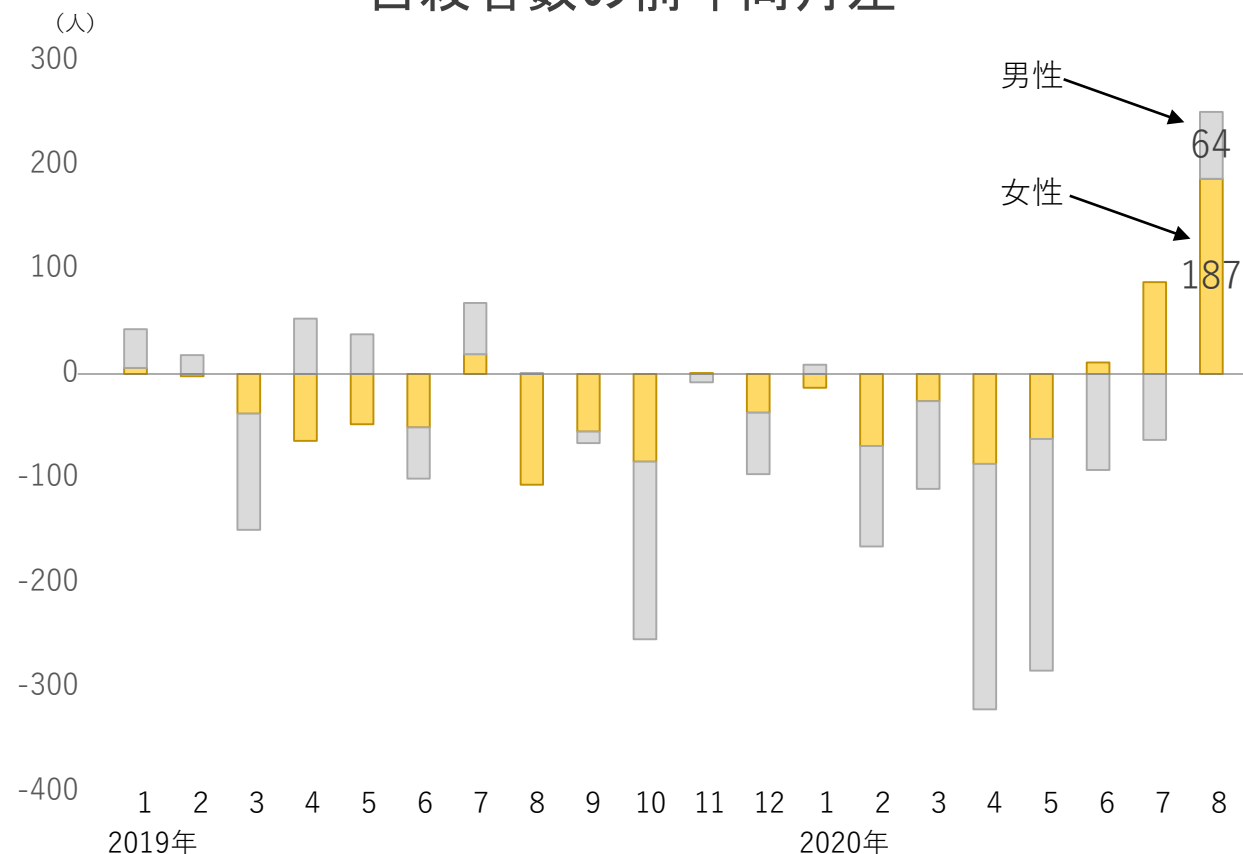
自殺者数の推移

- ✓ 自殺者数の推移を見ると、7・8月の女性の自殺者数（651人）は直近5年間で最多。
- ✓ 前年同月で見ると、男女とも2020年4月・5月は少なく推移。女性は6月から増加に転じ、8月には大幅に増加（+187人）。

自殺者数



自殺者数の前年同月差



(警察庁HP「自殺者数」より作成。原数値。2019年までは確定値。2020年は9月14日時点暫定値。)

新型コロナウイルス感染症の影響下における
生活意識・行動の変化に関する調査

(項目一覧)

1. 生活意識の変化
2. 生活行動の変化

3. 将来の生活意識・行動の変化
4. 時点比較/パネルデータ

令和2年6月21日

内閣府
政策統括官（経済社会システム担当）

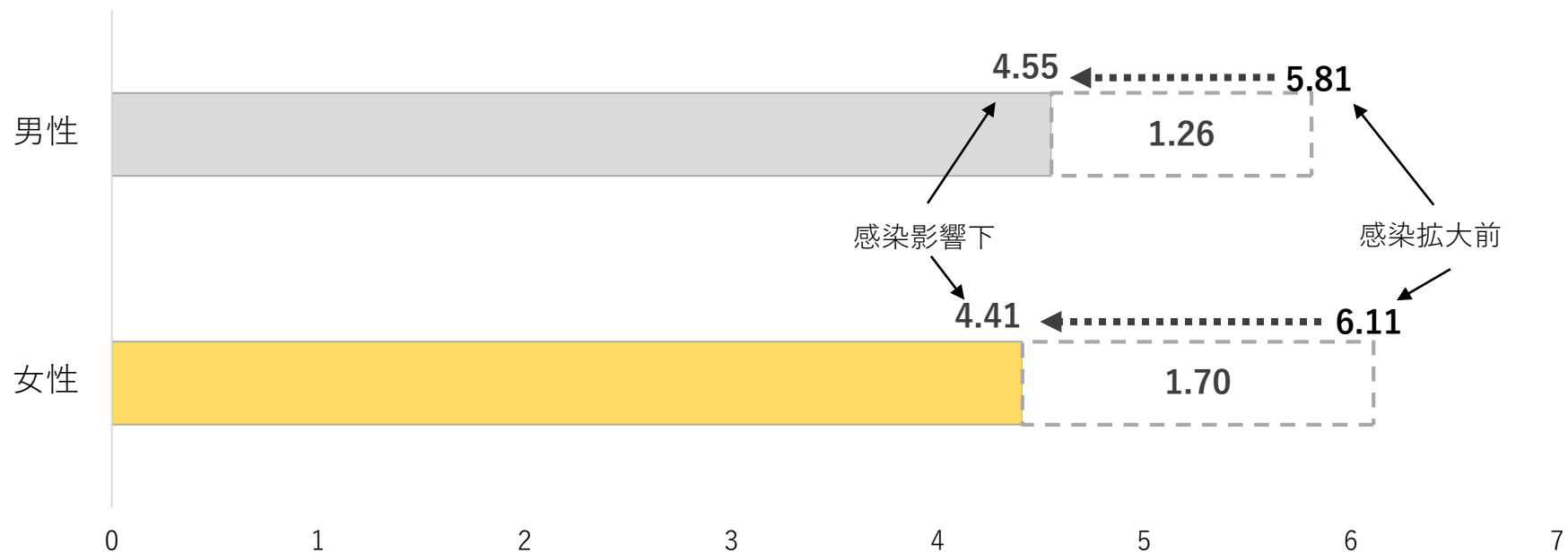
- 名称 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
- 公表 令和2年6月21日 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）
- 対象者 全国の15歳以上のインターネットパネル登録モニター
- 調査方法 インターネット調査
- 回収数 10,128件
- 調査期間 令和2年5月25日～6月5日
(5月25日～29日に半数を回収し、6月1日～5日に残りの半数を回収)

上記調査の内容も踏まえ、令和2年9月11日に『「満足度・生活の質に関する調査」に関する第4次報告書』を内閣府政策統括官（経済社会システム担当）が公表

次頁より上記調査・報告書の
内容を引用・抜粋

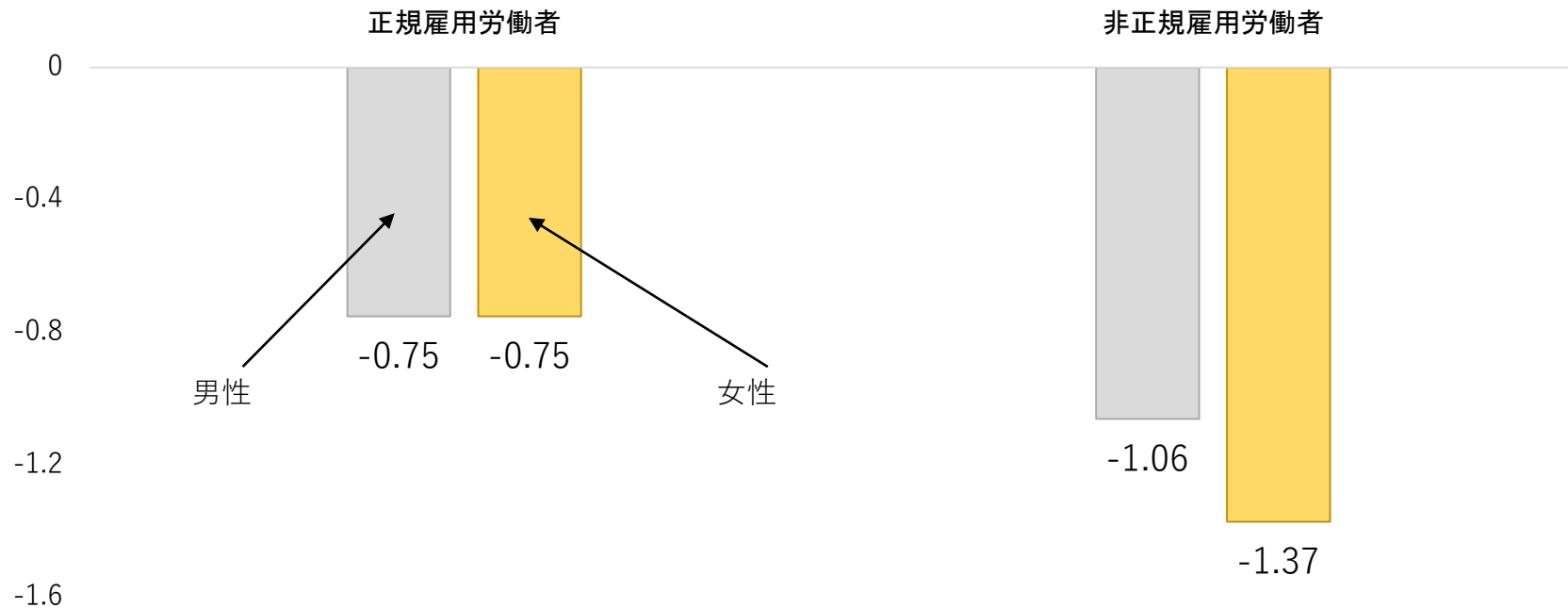
- ✓ 男女別の感染拡大前後の総合主観満足度の変化は、以下のとおり。
- ✓ 満足度（生活全体）平均の変化を男女別に比較すると、女性は平均満足度が1.70低下しており、男性の1.26よりも低下幅が0.44大きくなっている。

男女別・感染拡大前後の「総合主観満足度」の変化



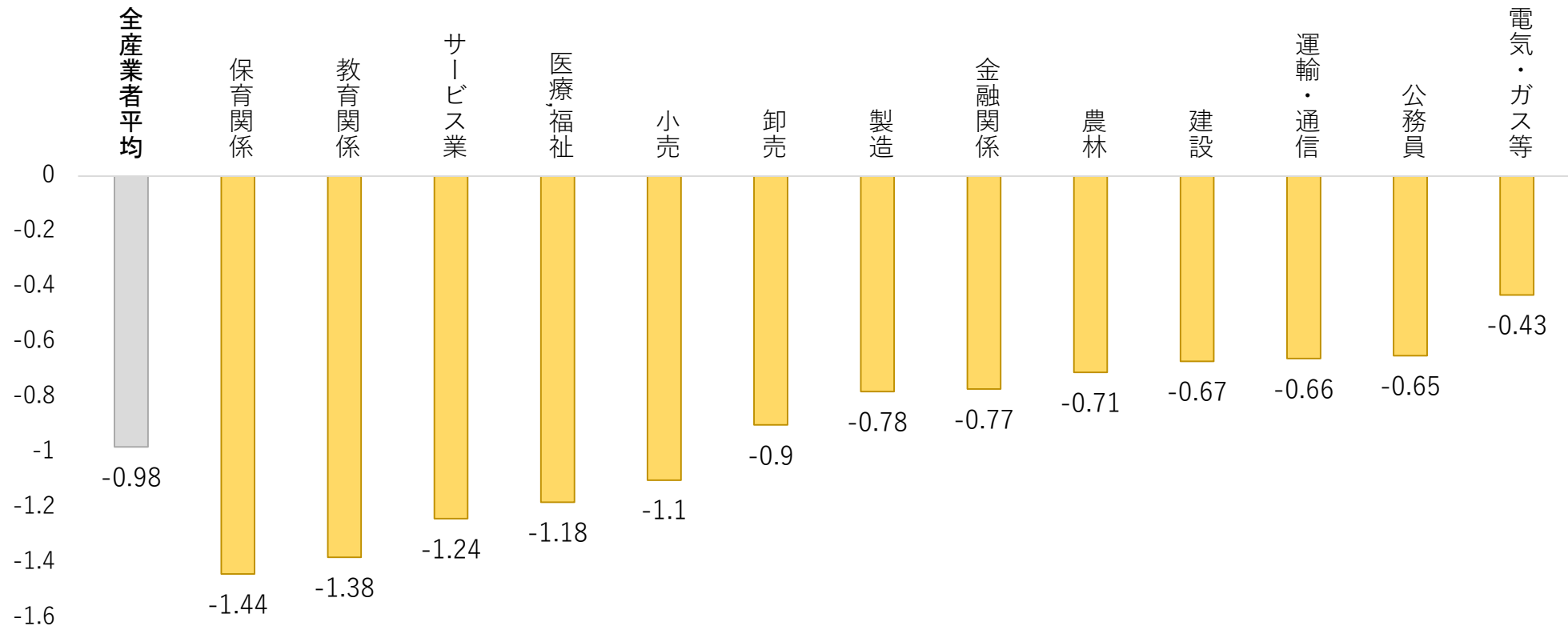
- ✓ 女性の非正規雇用労働者は、正規雇用労働者や男性の非正規雇用労働者と比べて仕事満足度の低下幅が大きく、低下幅は1.37となっている。

男女別・雇用形態別「仕事満足度※」の低下幅



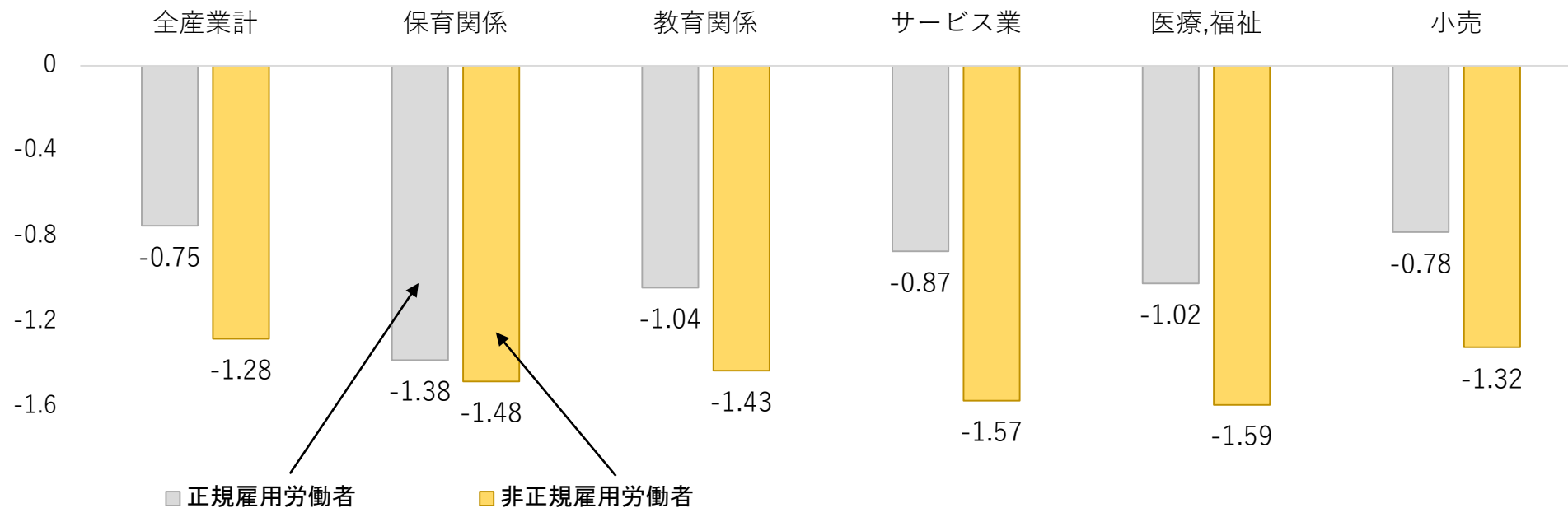
- ✓ 「保育関係」「教育関係」という子供と直接接することが多い産業が、最も仕事満足度の低下幅が大きくなっている。
- ✓ 次に「サービス業」「医療、福祉」「小売業」といったテレワークがしにくい対面サービスを提供する産業が続いている。

産業分類別「仕事満足度※」の低下幅



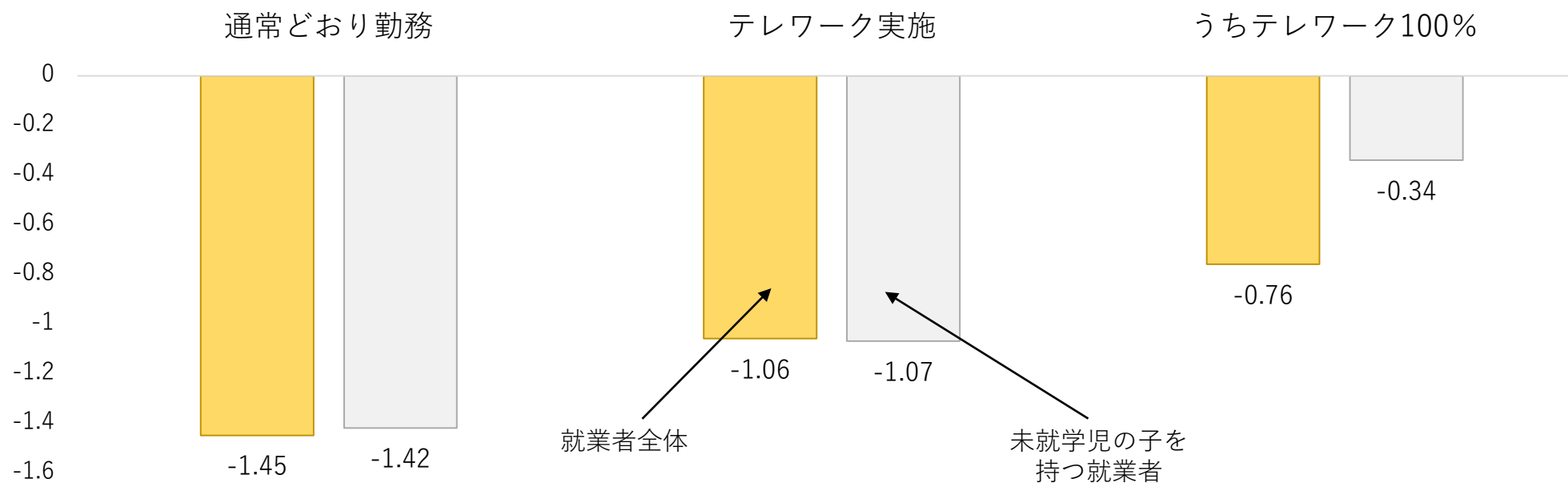
- ✓ 仕事満足度の低下幅の大きな5つの産業について見ると、最も満足度の低下幅の大きかった「保育関係」については、正規雇用労働者・非正規雇用労働者の低下幅が概ね同程度である。
- ✓ 一方、正規雇用労働者・非正規雇用労働者の間の満足度の低下幅の差が大きいのが、「サービス業」（差が0.70）、「医療、福祉」（差が0.57）、「小売業」（差が0.54）の3つである。

産業分類別・雇用形態別「仕事満足度※」の低下幅



- ✓ テレワークを実施した就業者の満足度の低下幅は1.06となっており、通常どおり勤務した就業者の1.45よりも、低下幅が小さい。
- ✓ 特に、テレワークを100%で実施する就業者の満足度の低下幅は0.76となり、通常どおり勤務の場合の約半分である。
- ✓ また、未就学児の子供を持つ就業者が、テレワークを100%で実施する場合、満足度の低下幅は0.34となり、通常どおり勤務と比べかなり小さくなる。

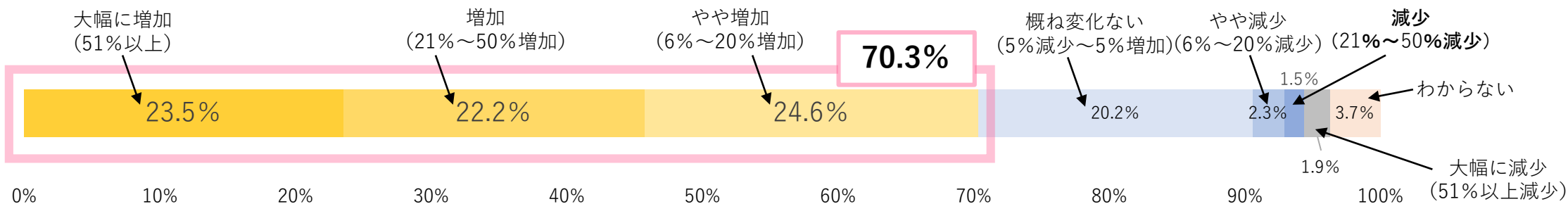
「満足度（生活全体）※」平均値の低下幅



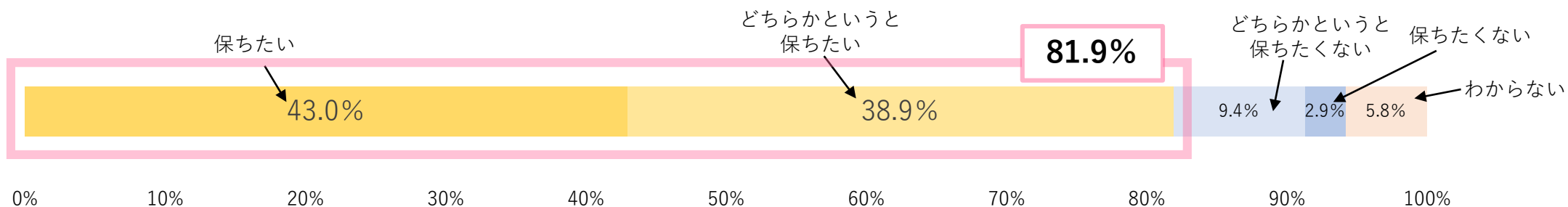
内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」、『「満足度・生活の質に関する調査」に関する第4次報告書』より

- ✓ テレワーク等の働き方の変化や外出自粛等の感染症の影響により、子育て世帯の70.3%が家族と過ごす時間が増加した。
- ✓ 現在の家族と過ごす時間を今後も保ちたい、という回答が81.9%あった。

<質問①> 今回の感染症の影響下において、家族と過ごす時間はどのように変化しましたか。

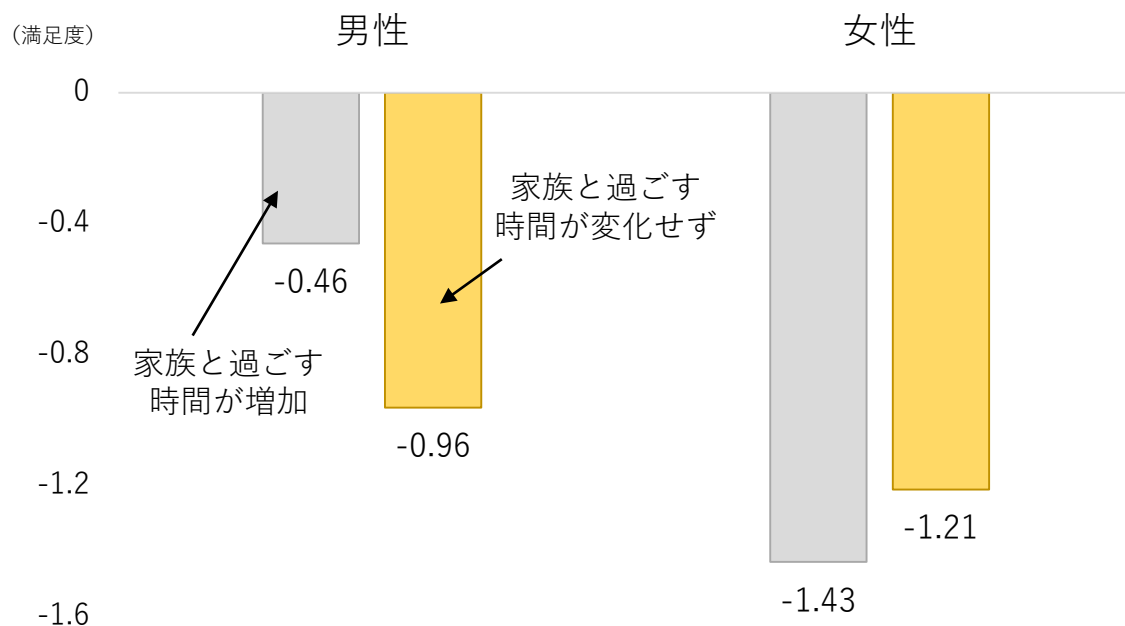


<質問②> 現在の家族と過ごす時間を今後も保ちたいと思いますか。(感染症影響下での家族と過ごし時間が増加したという回答者に質問)



- ✓ 家族と過ごした時間の増加と、子育てのしやすさや生活全体の満足度の関係を見ると、男女で異なる結果が見られる。
- ✓ 男性の場合は家族と過ごす時間が増加した方が「子育てのしやすさ満足度」「満足度（生活全体）」の低下幅が小さい一方、女性の場合は家族と過ごす時間が増加した方が「子育てのしやすさ満足度」「満足度（生活全体）」の低下幅が大きい。

家族と過ごす時間の変化と
「子育てのしやすさ満足度※」の低下幅



家族と過ごす時間の変化と
「満足度（生活全体）※」の低下幅

